木にこだわる建築家 34

松富謙一氏

CASEまちづくり研究所

生活の場としての「まちづくり」

OSB型枠＋内装など

CASEまちづくり研究所（大阪市）で、まちづくりと設計を融合させた活動に取り組む松富謙一氏（1級建築士、大手前大学、近畿大学非常勤講師）は、長屋すとっくばんくねっとわーく企業組合の代表理事でもある。「私のまちづくりと設計活動の原風景は生まれ育った大阪の下町、三国の木造住宅や店舗の密集地だ。元気なおじちゃん、おばちゃんがいて、子どもらは路地を走り回っていた。阪神大震災を経験して、改めて人と人とのつながり、生活する場としてのまちづくりが私の設計活動の原点となった」と語る。

同氏のまちづくり活動の歴史は長い。尾道での古民家再生プロジェクトへの参加、空堀地区長屋ストックバンク事業、東中島定期借地権付きコーポラティブ住宅建設事業など多くの実績がある。特に都市部での取り組みは、地域特有の景観形成に寄与する木造住宅ストックの活用、地域資源を生かした商業者の新規事業展開に寄与する地域活性化、まちづくりを起点とした地域内雇用の促進、地域の高齢者が住みやすいまちづくりを重視する。

近畿大学では八尾市営住宅再生を演習課題に、学生と取り組む。「建築科の学生が自らフィールドに出て、治具を使い、人と話すことでリアルに物事を考えられるようになる」と語る。

活動の一環として、さきごろ社会福祉法人が運営する総床面積1000平方㍍の保育園を、まちの人たちと一緒に設計した。土地は市有地で、建物を社会福祉法人が地代を払って運営する仕組みとした。場所柄、木造は困難でRC造としたが、初の手法として、OSBを型枠使用し、そのまま壁面に現し使用した。湿潤等RC構造の影響を受けないかなど、何回か実験して問題がないことを確認し施工した。

松富　氏

天井内装や間仕切りにもOSBを使用した。「内観はストランドの異方向性が大阪的なユニークな意匠を出せた」と振り返る。

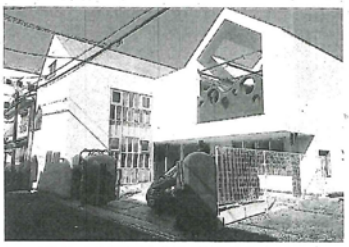
この物件を契機に、まちづくりと絡めた保育所設計を多く手掛けるようになった。都市部の空き家スペースを活用し、保育所、デイサービスセンターに再生して、これを起点にまちづくりを行う。

「定年退職した人も地域の財産と位置付け新たな仕事を提供する場となることを願っている。積み上がったものが形になるというのが、私の目指すまちづくりだ」と語る。

現在、取り組んでいるのは、大手前大学、村上木材、エムズ構造設計事務所などと保育園等の事業用建築物の木造化のための産学連携活動ネットワークを活用した設計で、このなかで問題となるスパン拡大の解決のために共同開発した木製ボックスビームも、連携のなかで生まれた。共同開発した木製ボックスビームを箱型梁とした木造保育所の設計では、5～8㍍スパンを確保でき、部材に流通材原材料を使用することでコスト面でも競争力がある。

ただ、管轄省庁や法制度面の規制で、幼稚園や学校は木造・木質化の道が開けているが、保育所の木造化は極めて難しいと指摘する。

谷町6丁目の空堀長屋ストック再生プロジェクトでは、戦災を免れた古くからある空き長屋をデイサービスセンターに改修したが、空き屋をスケルトンにして組み合わせる建築設計だ。「国が先導する国産材振興は、建築業界でも本流になりつつあるが、海外産木材とのすみ分け、国産材を使用する建築上のメリットなど疑問点も少なくない」と語る。



まちづくり活動と設計を融合させる

同氏は、設計士として、ことさら木材にこだわる考えはなく、むしろ木とコンクリートの一体化に建築の可能性を見出そうとしている。鉄、コンクリート、木材の3つを対等に、その長所を生かして組み合わせる。

メモ

▽CASEまちづくり研究所＝〒533－0031 大阪市東淀区西淡路1－3－26－401。電話06・6325・2299。